失文法発話資料の再分析

鈴木　正
久保田　正人

１．はじめに

この研究ノートは、何かを主張したり、論証するというより、むしろ、原資料をできうるかぎり適切に分析することに主眼を置く。「できうるかぎり適切に」というのは、原資料の分析および解釈にあたって、なにかを加えたり、減じたりする場合は、これを必要最小限に抑え、可能な限り原資料がおのずと語るのにまかせるという趣旨である。

この研究ノートが対象とする資料は、Sasanuma, Kamio and Kubota（1990a, b）（以下、SKK（1990a, b）と略記する）で詳細な統語分析が施された「失文法」（agrammatism）と通称されている失語症状である。失文法とは、日本語では、口頭発話において、助詞や助動詞の脱落、動詞その他の活用不能など、主として「文法的要素」あるいは「機能的要素」と呼ばれる要素の運用が選択的に障害されているものであり、発話はゆっくりで、ぎこちない。ただし、語彙項目および語順には問題がない、といった症状を呈するものである。

SKK（1990a）は左半球損傷による後遺症としての失文法を分析の対象とし、SKK（1990b）は右半球損傷による後遺症としての交叉性失文法を分析の対象としている。一般に失語症というと、たとえば左半球前頭葉下前頭回の弁蓋部と三角部に位置する44野とか、上側頭回後部に位置する22野などの器質的病変による後遺症として現れるので、ほとんどの患者においては左半球の病変が引き金になっている。ところが、失文法症状は、左半球損傷の場合は島と弓状束が共通した損傷部位であるが、右半球損傷によっても引き起こされるので、責任病巣はいまだ特定できていない。しかも、SKK（1990a）の調査では、日本語話者の失語症患者501例の連続症例中、ヨーロッパの諸言語に見られるのと同様の、あきらかな失文法症状を認めたのは、わずか２例しかなかった。

２．再分析の背景

真性の症例が少ないゆえに、SKK（1990a, b）では、患者の発話資料の分析にあたって、理想化された話者（文法や文脈に合致した完全文しか発話しない話者）を想定し、失文法患者の発話が、そういった理想化された話者の発話とどのように異なるかをみることで、その特色を明らかにしようとした。

たとえば次の発話をみてみることにしよう（患者２田中さん（女性）「病歴」発話番号12）。

(1) a. 言うことも　子どもみたい　しゃべりかた
　　b. 言うことも　子どもみたい［な］しゃべりかた

SKK（1990a）は、(1a）の発話にたいして、患者が発していない「な」という助動詞が脱落したものと想定し、「子どもみたいなしゃべりかた」という関係詞節が患者が本来発話しようとした形だったとした。

しかし、「な」が脱落したとする根拠は何かというと、「な」を入れないと、「しゃべりかた」の部分が直前の部分とつながらず、いわば宙ぶらりんになってしまうからある。つまり、

(2) 言うことも子どもみたい　しゃべりかた

という発話は、全体としてみると、文法的に正しくないようにみえる。「しゃべりかた」の部分をなんとか直前の部分とつなげるには、「子どもみたいなしゃべりかた」とするしかなかったのである。

ところが、そうしたがために、かえって、発話全体がおかしなものとなってしまった。SKK（1990a）が復元したと称している次の発話は日本語として奇妙である。

(3) 言うことも子どもみたいなしゃべりかた

「言うことも子どもみたい」だけであれば違和感はないが、「言うことも……しゃべりかた」という連続は奇妙である。「言うこと」（内容）と、「しゃべりかた」（話し方）が、一つの文の主題と陳述に配置されるような文は意味的に整合性がとれないように思われる。それにたいして「言うこと」（内容）と「子どもみたい」（内容の評価）であれば主題と陳述の組み合わせとして容易に整合する。

このように、SKKは、理想的な話者が発する文法的な文と対照させることで、失文法患者の発話の特徴を抽出しようとしたのだが、患者の発話を完全な文に復元することを求めるあまり、余計な要素を加えて、かえって患者の発話を歪めるという結果を招く分析になっているところがあったのである。

このことを指摘したのは、われわれ筆者のうちの一人で、自身が失語症の後遺症を持つTSであった。TSはみずからの経験から、SKK（1990a, b）の分析において正しい発話を復元するために付け加えられた要素の多くが、患者なら、もともと言わないのがふつうではないかと感じたのである。たとえば上記の（1a）の発話については、「言うことも子どもみたい」と言い終わった後に、「しゃべりかたがね」といった意味で、あとから補足的に追加しただけではないか。そういう、いわば “afterthought” の用法であれば、失語症患者にかぎらず、健常者でも頻繁に活用しているものであり、そういう解釈ができるのであれば、「な」の挿入などという余計なことをしなくてよいことになる。つまり、(1a）の発

話は、SKK の分析とはちがって、この形のままでよかったということになるのである。

３．再分析の視点

その一方で、患者の発話に一定の要素を加えなければ日本語にならないというものもある。次の（4）の発話は上掲の（1a）の直前に発せられたものである（患者２田中さん（女性）「病歴」発話番号11）。

（4）あの　自分　思った　あの　相手　伝え　ない（言うことも　子どもみたい　しゃべりかた）

SKKはこれを次の（5）のような発話を意図していたものであったと分析した。

（5）自分［が／の］思った［こと］［を／が］相手［に］伝え［られ］ない

すなわち、（4）の発話は、助詞、名詞、助動詞などが脱落したものであり、そのような要素を復元すれば文法的な文になるというのであった。

しかし、この復元された形が、患者が発話時において本当に意図していたものであったかどうかについては確証がない。SKKでも言及したように、この患者は、後日、この発話の記録を見せられて、おかしなところがあれば手直しするように指示されたとき、「こと」「に」「られ」を挿入したのである。SKKはこれを基に、時間が経っていても、患者自身が復元した形が、発話当時、患者が発話しようとしていた形であると想定した。が、この判断は正しかったであろうか。

正しかったかもしれないし、正しくなかったかもしれない。第一、患者本人は括弧で囲った部分を発話していないのであるから、どのような要素が脱落していたのかは推測するしかない。もっといえば、文の生成過程において、本来配置されていた要素が途中で脱落したというのではなく、はじめから問題の箇所に要素が挿入されていなかったという可能性も一概には排除できないのである。

もちろん、失語症患者の感じ方がそのまま分析の正当性を保証するものであるわけではないこと、言うまでもない。たとえば上掲の（4）と（5）をもう一度みてみることにしよう。比較を容易にするために、原発話にあった「あの」というつなぎ語は外しておくことにする。

（6）a.（=4）自分　　思った　　相手　　伝え　　ない
　　b.（=5）自分［が／の］思った［こと］［を／が］相手［に］伝え［られ］ない

筆者二人はこの発話の分析に相当長い時間をかけた。TSは、当初、次のような分析を提案した。

(7) a.「自分　思った」は「こと」にかかる関係詞節ではない。「自分、思った」(「私は思いました」の意）で一つの文が終わり、次の「相手……」とは連続していないのではないか。

b.「に」についてはSKKの分析を認める。「に」の復元は必要。これがなければ「伝え　ない」にたいして「相手」が主格なのか与格なのかという文法関係がわからない。

c.「伝え　ない」は「伝えてない」の縮約形。患者は意図的に「伝えない」ではなく、「こんな言葉遣いでは自分の考えていることを相手に伝えていないと思った」というのが患者の言いたかったことではないか。

この分析案にたいしてもう一人の筆者（MK）は、(7b）の「に」に関してはそのとおりであろうとした。(7a）の独立節の解釈についても、最初の２語だけでまとめられるならば、さしあたってはそれも可能な解釈の一つであろうとした。が、(7c）については、賛成できなかった。それは接続助詞の「て」が脱落したとする想定に無理があると思われたからである。

SKKが調査した501例の連続症例を含めて、筆者らが調査できた範囲の発話資料にあっては、いかなる種類の失語症状においても、またその重症度がどの程度であっても、接続助詞「て」を落とした患者はいなかったのである。ここでいう接続助詞の「て」とは、助詞の「て」の用法のうち、動詞に「ある」「いる」「くる」「いく」「しまう」「やる」「もらう」「くれる」など、状態、状態の変化、授受などを表す補助動詞を接続するときの用法のものである。たとえば「歩いていく」「歩いてくる」のような用法である。この用法の接続助詞「て」は、どんな患者も誤ることなく必ず用いていたのである。これを最初に指摘したSKKは「て」の義務性を一つの発見として強調した。

接続助詞の「て」がけっして落とされることがないということには、根本的な理由がある。係助詞や格助詞は、仮に脱落していても、文脈から復元可能であり、その意味で「余剰的」であるといえるのだが、接続助詞「て」は、これを欠くと、そこに「て」があったと解釈することが容易でないのである。たとえば次の（8）のような架空の発話があったとしよう。

(8) a. お布団　敷いあります

b. お医者さん　来くれ

ここでは漢字で表記してあるから、あれこれ考えて、「て」が落ちていると想像することもできるかもしれないが、この発話を耳で聞いたらどうなるであろうか。「おふとんしいあります」「おいしゃさん　きくれ」と言われても、何のことかわからないのがふつうなのではないか。発話に出てこないと、そこに何があったかわからないというような性質をもつ要素は、失語症患者は、通例、きちんと、発話するのである（久保田（2007、第８章）を参照)。

そうすると、上掲の（7c）のように、「伝えない」は「伝えてない」の縮約形であると解釈するのは、接続助詞「て」の脱落は皆無であったというSKKの調査報告、および、その後の久保田（2007：124）の呼びかけにもかかわらず、筆者らの知るかぎり、いまだ接続助詞「て」の脱落が一例も報告されていないという事実にたいして、これを無視することになり、分析として採用するには難があった（なお、第５節の再分析の当該箇所に追加の情報があるので参照されたい）。

上述のように、接続助詞「て」は、これが脱落すると、当該の述語が意味をなさなくなることに特徴があるのだが、しかしながら、「伝えてない」から「て」を取ると、「伝えない」という、一見意味をなすようにみえる述語形になる。このことについて一言付言すれば、これは偶然の一致である。「伝えない」は「聞かない」などと同様に、はじめから「て」のない形であり、「伝えてない」から無理に「て」をとった形と、偶然に同音になっただけのことである。

以上のように、一方で失語症患者の直感を存分に発揮し、一方では言語学の知見をバランスよく考慮しながら、我々は長い時間をかけて、SKKの資料を一つひとつ再検討してきた。したがって、冒頭でも述べたように、この研究ノートは、原資料の姿を、理想化された発話と直接比較するのではなく、むしろ、理想化された発話に近づけるための過度の表現の追加を慎み、発話の姿を、意味解釈が成り立つかぎりにおいて、より原形に近い形で描くことをめざしたものである。その結果、本研究ノートの再分析で追加した表現の数は、SKKと比べると、６分の１でしかない。具体的にはSKKは156個の表現を追加しているが、本研究ノートでは25個である。このこと自体がすでに特定の主張をしていることになるのかもしれない。が、それは我々の再分析がおのずと語るのにまかせたいと思う。

４．失文法患者の発話の文体について

我々は、このたびの再分析の過程で、失文法患者の発話の文体について、従来の説とは異なる見解を持つに至ったので、ここに簡単に報告しておくことにする。

失文法患者の発話に関して、古くからこれを「節約された文体」とみなす説がある（初期の文献としてはPick（1913：96），Isserlin（1936）などがある）。「節約された文体」とは、内容の骨組みだけでも伝えるために必要不可欠な語を配列するが、その他の語句を表出する余力がないために省略した、というものである。この説は現在でも広く支持されているようであるが、拠ってきたる前提に問題なしとしない。

「節約された文体」説は、言語活動というものを、まず言いたいことがあって、しかもその内容が明確であり、次にその内容にふさわしい言語表現を探して配列する、という順序に進むものであると想定しているようである。つまり、言語活動とは「意味あり、形を求む」というプロセスであるとする説である。

しかしその一方で、「言葉にしてみるまでは、自分が何を言おうとしているのか、その端々まではしかとはわからない」（W.H. Auden, “Words and the Word”）という考えもある。言葉にして、はじめて、思考の姿を明確に認識することができるというのである。

言語活動における形と意味の関係は、論理的には次の４通りのものがある。

(9) a. 形と意味の両方がある
b. 形があって意味がない
c. 意味があって形がない
d. 形と意味の両方がない

このうち（9d）の、形と意味の両方がない場合は、当然、除外される。（9a）については「死刑は反対である。死刑を廃止して仇討ちを認めろ。」といったごくふつうの文を挙げればよいであろう。形が整っており、意味も明瞭である。（9b）については、たとえば、Chomsky の Colorless green ideas sleep furiously.（無色の緑色の考えが激怒しながら眠っている）のような例を思い出せばよいであろう。文法的には何一つ問題がないのに、意味するところがつかめない。日本語の例をといわれれば、「ずいずいずっころばし　ごまみそずい　ちゃつぼに　おわれて　とっぴんしゃん　ぬけたら　どんどこしょ」でも挙げておこう。形はあるが意味がないのである。ただ、留意すべきは、この、形はあるが意味がないという言語活動は、ちょっと身の回りを見渡してみると、日常生活において意外と頻繁に経験しているものであることに気づくであろう。（9c）はどうであろうか。この場合の「意味」はもちろん「言葉で表すことのできる意味」である。言葉で表すことのできる意味に言葉がなかったら、どうなるであろうか。それは「意味がない」ということにほかならない。

そういうふうに考えてゆくと、形に盛られても意味が成り立たない場合もあるが、意味が成り立つには、なによりも形に盛られることが必要である。形のないところに意味はないといってよい。もちろん実際の発話においては、意味と形は互いに綱引きをしながら明確な関係を作り上げてゆくのだが、言葉として定位する前の内容は、明瞭というにはほど遠く、「茫漠」というに近い。適切な言葉が見いだせないときは自分の考えていることも明瞭ではないといってよいだろう。適切な言語活動は、意味に合わせて表現を選んでゆくというより、むしろ、表現の候補を挙げながら、茫漠とした考えに網をかぶせていき、次第に「意味」としての輪郭を明確にしてゆく過程ではないかと思われる。「言語の機能は思考の明確化にある」といわれるのも、この意味である。その点で、言語活動は、最終的には形が支配権を握っているともいえるであろう。ここでいう「形」とは、個々の語彙のみならず、それらを一定の内容にまとめあげる統語構造や音韻構造なども含むものである。

失文法患者が「節約された文体」を用いているにしても、省略された語句の内容を伝達内容に含めていないわけではない。節約した分、内容が薄くなっているわけではない。むしろ、一定の構造の上に表出された語句に、表出されていない語句の内容まで盛り込もうとしているようにみえる。これは、むしろ、「情報の過剰な圧縮化」とでもいうべきものであるように思われる。（「情報の圧縮」ということばは安井（印刷中）が別の文脈で用いているものであるが、失文法患者の発話の文体を特徴付ける言い方としても有効であると

思われるので、表現の一部を借用した。）

その例として次の（10）の発話を見てみることにしよう（患者３林さん（女性）「桃太郎」）。

（10）お―お―おばあさん　が　洗濯物　を 川　に　もって　いき　ました　どんぶらこ　どんぶらこ　と　も―桃　が　見つけて　そ―そして　中　から　も―桃太郎　は　……う―うま―生まれて　き　ました

ここで問題になるのは、「桃が見つけて」の部分である。SKKはこの箇所について、「が」は誤りで、本来は「を」を用いるべきであったと分析している。「桃が見つけて」のままでは文法的な文にならず、これは「桃を見つけて」の誤りであるとしたのである。

しかし、そのように分析すると、「どんぶらこ」というオノマトペ（後述）とうまくつながらなくなる。「どんぶらこと桃を見つけて」では意味をなさないからである。この部分は、患者の助詞の使い方に誤りはないと認め、「が」をそのままにして、ただし、「どんぶらこと桃が［流れてくるのを］見つけて」という内容を意図していたと分析する方が全体として無理がないように思われる。

もっと妥当な分析があるならばともかく、そうでないならば、この事例では必要不可欠な表現である動詞＋名詞（「流れてくる」「の」）まで「節約」したことになり、失文法の文体が「節約された文体」であるとする考えの説明範囲を超えているように思われる。

それというのも、言語活動は、まず言いたいことがあって、それが明瞭であるとする前提に立つからであろう。たしかに、失文法患者は発話において身振り手振りが活発であり、表現意欲が旺盛であることを示しているが（井村（1943：72））、それはむしろ、表出できた言語表現を手がかりにして、そこに、いわば「搭載量」を超えた多くの情報を盛り込もうとする態度のあらわれと解することができる。「節約された文体」説の想定しているところとはちがって、内容が簡素化されているわけではないのである。言語活動において形が支配権を握っているということであるならば、失文法患者の発話の文体は、形の限界を超えた「情報の過剰な圧縮化」というほうがふさわしいように思われる。

５．オノマトペの多用について

オノマトペは、SKKの資料に含まれているものの、特に立ち入った分析が加えられていない現象であり、再分析の報告と合わせて、少し考察を加えておきたい。

日本語失語症患者が、ある内容を表現しようとして、それに該当する言語表現の代わりに、しばしば擬音語あるいは擬態語を用いることは、よく知られている。たとえば、風で飛ばされた帽子が水たまりに落ちて、それを拾い上げようとしているといった内容の四コマ漫画の絵解きとして、次のような発話がある。丸番号はコマの番号を示す。

（11）①　えーと　えーと　この　あの　あの　えー　あのう　帽子をかぶってる　杖をついてる　あのう　んー　男の人が　杖で歩く

② あ、これは　あー　ヒューヒューで　帽子をとばされた
③ うえで　男の人が　ヒューヒュー　帽子をとばれた　あのう　水の上で　男の人が　杖で　帽子を　取りに行く
④ あのう　水に　あの　びしょびしょで　あのう　水に　ゆ　あのう　帽子を水に　えー　杖で　えー　水に . . . 浮かばした

この発話において、患者は、「風」という言葉が使えず、代わりに「ヒューヒュー」という擬音語を用いている。

上掲の（10）にも擬態語が含まれている。

（12）（=10）お―お―おばあさん　が　洗濯物　を 川　に　もって　いき　ました　どんぶらこ　どんぶらこ　と　も―桃　が　見つけて　そ―そして　中　から　も―桃太郎　は……う―うま―生まれて　き　ました

「どんぶらこ」は「物が水の流れのままに浮きつ沈みつつして、漂いゆくさまを表す語」（『日本国語大辞典』）である。漂いゆく「さま」を表しているのであるから、音ではなく様子を表しており、つまり擬態語である。そして、前節で考察したように、この発話では「流れてきた」という動詞の意味も含めてこの擬態語が用いられているようである。

擬音語・擬態語はなにかの表現の代わりに用いられるだけではない。通常の言語使用の場合と同じく、ふさわしい言語表現とともに用いられることも、もちろん、ある。次の（13）は擬音語と擬態語が連続して発話されている例である。

（13）手術後　あのう　がちゃがちゃがちゃって　いうの　聞こえて　すこお-し　ぶるぶるぶるぶる　あの　から-ら-からだ　あのう…寒い

「がちゃがちゃ」は硬い物がぶつかりあって出す音を表しているから擬音語である。「ぶるぶるぶるぶる」は、寒さ、恐れ、緊張などのために体（の一部）が震える様子を表すから擬態語である。この体の震えを表す擬態語が、直後に「体　寒い」という表現で言い直されている。

擬音語・擬態語に関して不思議なことは、言語表現を間違えたり言いよどむ失語症患者でも、擬音語・擬態語を間違えたり言いよどむことはない、ということである。しかも、目標とする語彙の代わりに、それに対応する擬音語・擬態語を用いることすらある。あたかも失語症患者にとって擬音語・擬態語の方が使いやすいかのようである。どうしてそういうことになっているのであろうか。

一般に、擬音語や擬態語というと、表示される語音を聞いただけで、現実世界の自然音やありさまが想起されると思われやすい。が、自然音やありさまがわかるということであるなら、声帯模写の方がはるかに直接的である（cf. 安井（2012））。声帯模写はおそらく

世界共通であると思われるが、「ヒューヒュー」「どんぶらこ」「がちゃがちゃ」「ぶるぶる」と聞いて分かるのは、日本語話者だけである。「わんわん」と言われて犬の鳴き声であることがわかるのは日本語話者だけであり、bow-wowと言われて犬の鳴き声であることがわかるのは英語話者だけである。つまり擬音語・擬態語には言葉の国境があるということである。その点からすれば、声帯模写は言語の外にある現象であり、擬音語・擬態語は言語ごとに規定される語彙の一部であることになる。

ところが、ここでもまた不思議なことがある。Menn and Obler（eds.）（1990）には、日本語話者の失文法の症例のほかに、英語、オランダ語、ドイツ語、アイスランド語、スウェーデン語、フランス語、イタリア語、ポーランド語、セルボクロアチア語、ヒンディー語、フィンランド語、現代ヘブライ語、中国語を母国語とする患者の症例も収録されている。ところが、日本語以外でオノマトペが見いだせるのは次のドイツ語話者の１例のみである（Stark and Dressler（1990：388））。

（14）den　　ratsch-t
　　der Weck=er rea-t / ratz-t
　　the alarm is raging, is ringing

ratschen（南部方言あるいはオーストリア方言で用いられる）は同語源の擬音語名詞Ratsch（ガラガラ）と合わせて擬音語として意識されているようである（田中愼氏のご教示）。

日本語を除く上記13カ国語の中で、オノマトペと関わりが深そうにみえるのは中国語である。ところが、その中国語の失文法患者の症例を扱っている Packard（1990）においても、収録された発話資料にオノマトペが見いだせない。そして、Menn and Obler（1990）の英語話者の発話にも、擬音語・擬態語は１例も見いだせないのである。

もともと英語には擬音語はあるが擬態語がないから、擬態語が見いだせないのは当然なのだが、擬音語が１例も見いだせないというのは、日本語話者と著しい対照をなしている。

SKK が報告している症例には、以下に挙げる８種類のオノマトペが含まれている。

（15）わんわん、ぱたん、どんどん（歩く）、どきどき（する）、がたがた（になる）、どんぶらこ、きゃんきゃん、びしょびしょ

このうち、「きゃんきゃん」は２回用いられているので、計９個のオノマトペが用いられていることになる。同じ症例の患者でありながら、他の言語の患者と比べてオノマトペの使用頻度がずばぬけて高い。どうしてこういうことになっているのであろうか。比較を簡単にするため、擬音語だけを比べてみることにしよう。

日本語の擬音語は、そのまま用いるか、あるいは「と」（口語体では「って」）という引用を表す格助詞とともに用いられるのが通例である。格助詞が付いていても、付いていな

くても、通例、副詞として用いられる。

これに対して、英語の擬音語は、次の（16）にbow-wowの例を列挙するが、それぞれの文において、明確な標識を伴いながら、さまざまな品詞で用いられている。

（16）a. Pampered pooches bow-wowed judges on the first day of the world's largest annual dog show yesterday.（動詞・過去形・他動詞用法）

b. A top dog that won £220,000 for charity has bow-wowed out.（動詞・現在完了形・自動詞用法）

c. Simon Cowell was bow-wowed by Gin the dancing border collie.（動詞・受動態）

d. A cute Gloucestershire canine is bow-wowing his carers with his odd behaviour because he thinks he's a cat!（動詞・進行形・他動詞用法）

e. Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had a dog, E-I-E-I-O,
With a bow wow here and a bow wow there,
Here a bow, there a wow,
Everywhere a bow wow.（可算名詞）

f. Daddy wouldn't buy me a bow wow.（「わんちゃん」というほどの意の可算名詞）

bow-wow が時制や相や態や冠詞と共起し、とりわけ時制や相や態と共起する場合はそれに対応して語形変化するということは、bow-wowという擬音語が英語において十分に語彙化されているということである。換言すれば、bow-wowは語彙操作の対象になるということである。これに対して日本語の「わんわん」は、語形が変化することもなく、せいぜい副詞としてしか機能しない。その点で、英語の擬音語は日本語の擬音語より、はるかに、「言語化」が進んでいるといえる。

中国語に関しては、上述のように、Packard（1990）に報告されている中国語失文法患者の症例にもオノマトペが見いだせないのだが、それは中国語のオノマトペの性質と関係していると思われる。

中国語のオノマトペは、動詞と一緒に用いなければ何を表しているかわからないのがふつうである。たとえば日本語で「ザーザー」といえば雨の音とわかるが、中国語では、これに相当するオノマトペを用いても、「雨が降っている」と言わなければ、何を表しているのかわからない（周飛帆氏のご教示）。この点で、中国語のオノマトペは、それ自体では意味内容があいまいであり、単独でも用いられる日本語のオノマトペと比べて、他の要素への依存度が大きい。他の表現とセットで用いてはじめて機能するような表現は、情報を圧縮するための基盤語としては選ばれにくいのかもしれない。

以上を総括すると、英語のような言語における擬音語はほぼ完全に言語化されており、文法に縛られる度合いが大きい。中国語における擬音語は、意味内容が自立していない。それに対して、日本語の擬音語は意味内容が豊かで自立している割に言語化の度合いが小

さく、その分、文法に縛られる度合いが小さいといえる。オノマトペの使用が日本語話者の患者に特に目立つのは、このような日本語におけるオノマトペの特異的な性質が関係しているように思われる。

以上、長い前置きとなったが、再分析をまとめあげる過程で我々が考えたことの一端を紹介した。再分析のよりよい理解に資すればさいわいである。

5．資料の再分析

以下に、３名の失文法患者の発話資料、それにたいするSKKの分析、そして、我々の再分析を挙げる。各発話は原則として２行で表示し、上段に患者の発話、下段にSKKの分析と我々の再分析を示した。下段の表記で二重線が引いてある箇所は、SKKの分析で加えられた要素が不要であることを示す我々の再分析である。その多くは、随意要素であり、「脱落した」あるいは「省略された」というより、むしろ、はじめから「言っていない」とみなしたほうが失語症患者の直観に合うように思われるものである。再分析に説明が必要である場合は当該の発話の下に注記の形で示した。

患者１　斉藤さん

病　歴

１．萩・　たなか-ホテル・の……宿舎・に……いる　とき……とつぜん・

萩~~(の)~~たなか ホテル　の　宿舎　に　いる　とき　とつぜん~~[倒れた]~~・

→「萩たなかホテル」が正式名であり、患者はホテル名を正確に述べている。（の）の追記は不要。

→患者は発作が起こった時の様子を述べることが求められていたので、［倒れた］は折込済。

２．あと　は・おぼえて・いません・

３．あっ-あの-兄さん・が……６時-・ごろ・朝……しげお-くん・て……呼んだ・

４．あと　は・おぼえて・いません・

５．うむ・やぁ―萩―長門・あっ　ようど・の……人……　おぼえちょる・

〈萩〉長門~~(の)~~　用度　の　人~~(を)~~　おぼえちょる・

→「萩」は「萩たなかホテル」のことを念頭に置いた発話と思われるから、無用に削除するのは適切ではない。「長門」は萩の隣接地。萩の場所を特定しやすいにように付け足したか。

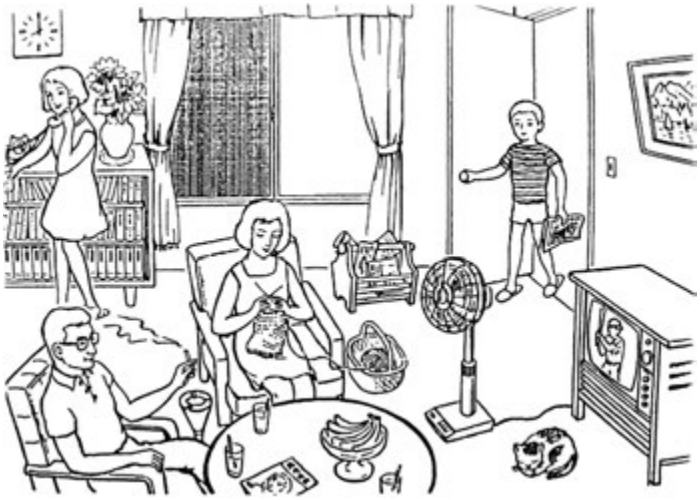
→（の）や（を）を含む格助詞について、SKKは optional（随意要素）と設定していた。このような設定はあたかも患者が格助詞を脱落させたかのような印象を与えるが、患

者の立場からすれば、「脱落」させたのではなく、はじめから用いていないといったほうが実情に即している。

6．あのぅ-しげお-くん しげお-くん・て……叫んだ　けど・反応 が　ない・
　　しげお-くん しげお-くん　て　　叫んだ　けど　反応 が~~〔なかった〕~~〈ない〉・
→当時の現場を臨場感あふれる形で再現していると思われるので、「ない」のままでよい。

7．よお―倒れちょった

一家団らん



1．姉さん・　　電話しよる・
姉さん~~(が)~~電話しよる・

2．巨人-阪神……　　中継・
巨人-阪神~~(の)~~　中継~~〔です〕~~・

3．お父さん・　　がんばれ　がんばれ・
お父さん~~(が)~~がんばれ　がんばれ~~〔と言っています〕~~・
→直接話法単独で発言動詞の意味も含めているものと考えられる。なお、引用助詞「と」は、直接話法文やオノマトペを従える用法のものは不要であると感ずる場合が多いが、事例によっては残した方がよいように感ずる場合もある。この線引きは「原則」というより「傾向」というくらいであり、その扱いはケースバイケースとし、無用に厳格な適用は避けることにした。

4．お母さん・　編み―物……　して　ます・
お母さん~~（が）~~編み　物~~（を）~~　して~~［い］~~ます・
→会話体であるから［い］の追記は不要。

5．すると……ぼく……　巨人-阪神　見たい　ね…　いい―よる・
すると　ぼく~~（は）~~　巨人-阪神~~（を）~~見たい　ね~~［と］~~いい―よる・
→引用助詞［と］は、あればよりよいが、なくてもよい。

6．扇風機……　涼しそう・
扇風機~~（が）~~　涼しそう~~［です］~~・

7．あと　は……ウン……ない・けど・

桃太郎

1．桃太郎……　いいました・
桃太郎（が）いいました・
→話の始まりとしてこの（が）は必要であると考えるので、SKKの追記のままとする。

2．犬　も・猿　も……雉　も……キビ団子・　やる　から……ついて　こいよ・
犬　も　猿　も　雉　も　キビ団子~~（を）~~やる　から　ついて　こいよ・

3．鬼―……征伐　を・しよう・

4．鬼……　こらしめて……えいえいおぉ　えいえいおぉ・
鬼~~（を）~~こらしめて　えいえいおォ　えいえいおォ~~［と言いました］~~・
→「えいえいおぉ」という雄たけび単独で発言動詞が含まれていると考えられるため、［と言いました］は追記不要。

5．すると　どう　でしょう・

6．鬼・が　参った　参った……助けて　くれ　助けて　くれ・と・
鬼　が　参った　参った　助けて　くれ　助けて　くれ・と~~［言いました］~~・

7．全部　宝物　やる　から……　言いました・
全部　宝物~~（を）~~やる　から［と］言いました・

8．桃太郎・は・いいました・

9．悪い・こと……　せんで・ください・
悪い　こと~~（を）~~せんで　ください・

10. ばあちゃん　　じいちゃん……　たいせつ　に　して　ください・
ばあちゃん~~［と］~~じいちゃん~~（を）~~たいせつ　に　して　ください・

11. おしまい・
おしまい~~［です］~~・

田植え・稲刈り

1．百姓さん……　田植え・
百姓さん~~（が）~~田植え~~［をしている］~~・
→患者は絵解きをしているのであるから、体言止めで十分であり、［をしている］は追記不要。

2．さいしゅ―イェイェ稲．刈り・
〈さいしゅ〉　　稲　刈り~~［をしている］~~・
→「さいしゅ」は「採取」の可能性があり、これを「稲刈り」で言い直していると考えられるから、削除不要。

3．子ども　が・手伝い……
子ども　が　手伝い~~［をしている］~~……

4．父ちゃん　母ちゃん―ふん―ふん―ちょっと　ど忘れした・

5．なんて　いおお　かい　ね・

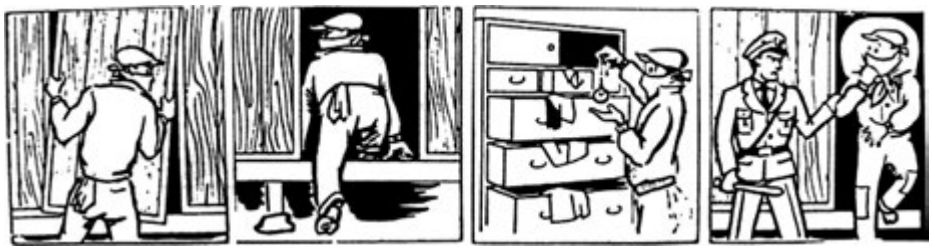
6．先生　教えて　ください・

7．あの……米・　　つんじょる・
あの　　米~~（を）~~つんじょる・

8．あの……なんて　いおお　かい　ね・

9．たる……　　なんで―運んで……いきよる　とこ・
｛たわら｝~~（を）~~なんで　運んで　　いきよる　とこ~~［だ］~~・
→SKKは「たる」を「たわら」の言い誤りとしている。賛成である。

泥棒



1．泥棒　が……戸・　　あけよる・
泥棒　が　　戸~~（を）~~あけよる・

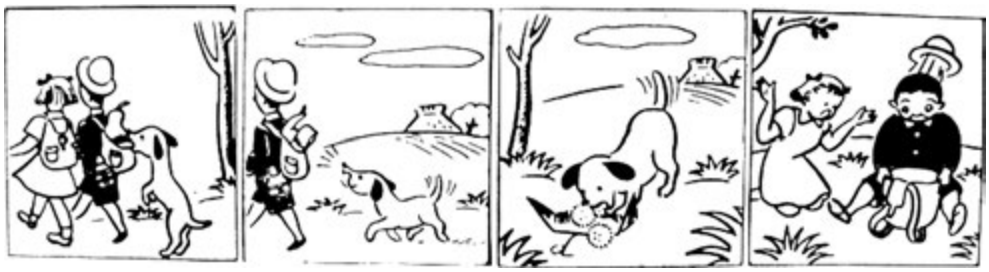
2．ごめんなさい　よ・もくどく　で・
ごめんなさい　よ・｛どそく｝　で・
→「もくどく」を、SKKは｛どそく｝（土足）に変換した。絵を見るとそういう可能性もあるが、音韻的に近似しないようにも思われる。「黙読で」を「だまって」の意に拡大して用いた可能性もある。

3．あった　あった……ダイヤ・かも―しれん・
あった　あった……ダイヤ　かも　しれん~~［と言った］~~・
→登場人物に感情移入した絵解きならば発言動詞は不要。

4．すると　どお　でしょう・

5．警察―……さん　に　捕まった・

ピクニック



1．犬……あっ―やぁ……これ・　　違うん―じゃ　ない　か・
犬　　やぁ　　これ~~(は)~~違うん　じゃ　ない　か・

2．ワンワン……犬……　おむすび・　　ある　よ・
ワンワン　　犬~~(が)~~おむすび~~(が)~~ある　よ~~[と言った]~~・
→オノマトペの拡張的使用の可能性あり。

3．よいしょ……おむすび……ごっそう　じゃ・

4．ぼく……　　あと　　開けた　ら・おむすび……　　なかった・
ぼく　~~(が)~~あと［で］開けた　ら　おむすび~~(が／は)~~なかった・

5．いっかん　の　おわり・

雨降り

1．お母さん……　傘・　　もって　いきなさい・
　お母さん~~（が）~~傘~~（を）~~もって　いきなさい~~［と言った］~~・

2．ぼく・　　いい　よ・
　ぼく~~（が／は）~~いい　よ~~［と言った］~~・

3．雨　が……降り出した・

4．母ちゃん・　　だから　ゆったろう　が・
　母ちゃん~~（が／は）~~だから　ゆったろう　が~~［と言った］~~・

5．傘―あ―雨　に―傘―雨　に……う―打たれて・ぼく・傘・

患者２　田中さん（女性）

病　歴

1．あの……８月７日　　倒れました・
　　８月７日~~（に）~~倒れました・

2．あの……長火鉢　　すぐ　そば　　お布団　　しいて　あります・
　　長火鉢（の）すぐ　そば（に）お布団~~（が）~~しいて　あります・

3．そこ　　あの・起き上がり　パタン　　倒れました……
　そこ［で］　　起き上がり　パタン~~［と］~~倒れました……
　→擬音語「パタン」のあとに「と」があればよりよいが、余剰的でもあるので、追記が必要というほどではないと考える。

4．子ども　　早く救急車　　呼びなさい
　子ども（に）早く救急車~~（を）~~呼びなさい~~［と言いました］~~
　→［と言いました］があれば客観的な報告文になるが、臨場的な回想と考えれば直接話法文だけでもよい。

5．子ども　でも先生　　お電話する・
　子ども~~（が）~~先生（に）お電話する・
　→SKKは「でも」を「が」の誤りとしているが、これが誤りであることを示す証拠はない。患者の発話を無用に改変しないように、「でも」のままとする。

6．松井病院―かかり付け　　お医者さん　　来て　くれ；

かかり付け（の）お医者さん~~（が）~~来て　くれ；

7．すぐ・松井病院　　入院しました・
すぐ・松井病院~~（に）~~入院しました・

8．はい，右側　が　不自由　です・

9．右・です・　右利き　です・

10. 全部　右　　します・
全部　右［で］します・

11. あの―自分　　思っ・た・あの・　　相手　　伝え　　ない・
自分~~（が／の）~~思っ　た［こと］~~（を／が）~~相手（に）伝え［られ］ない・
→「3．再分析の視点」における考察を参照。ただし、そこで解説した接続助詞「て」の義務性は自発的な発話においてみられることであるが、井村（1943：75）は長文の音読検査で、「焼けていました」を「焼けました」と読んだ患者の例を紹介している。これが接続助詞の脱落の例になるのか、それともたんなる誤読なのかは、わからない。いずれであるにしても、「焼けました」は「伝えない」と同じく、「焼けていました」とは別個に成り立ちうる語形式である。

12. 言う・こと　も　子ども-みたい　　しゃべり―・かた・
言う　こと　も　子ども　みたい~~［な］~~しゃべり　　かた~~［です］~~・
→「子どもみたい」で文は一度終わる。その後の表現は、「しゃべりかたがね」といった補足的な意味で追加された可能性もあり、［です］の追記は避けたい。「2．再分析の背景」における考察を参照。

13. はい・

動作絵

1．男　の・子　　運動・し　帰って　きた・
男　の　子~~（が）~~運動　し　帰って　きた・

2．手　　洗って　　ます・
手~~（を）~~洗って~~（い）~~ます・

3．ぼうや　　寝んねして　いる・

ぼうや~~(が)~~寝んねして　いる・

4．ぼうや　　寝て　います・
ぼうや~~(が)~~寝て　います・

5．おとの―男　の・子・　　徒競走して　います・
　　男　の　子~~(が)~~徒競走して　います・

6．トンボ　　とんで　　ます・
トンボ~~(が)~~とんで~~[い]~~　ます・

7．しおから―トンボ・
しおから　トンボ~~[です]~~・

8．水泳　して　る―男　の　子・　　水泳　　して　　ます・
　　男　の　子~~(が)~~水泳~~(を)~~して~~[い]~~ます・

9．赤ちゃん　　泣いて　います・
赤ちゃん~~(が)~~泣いて　います・

10．ネコ　　エサ　　もらい―とっ―お魚　　たべて　　ます・
ネコ~~(が)~~エサ~~(を)~~もらい　　お魚~~(を)~~たべて~~[い]~~ます・

11．男　の……　　水　　のんで　　ます・
男　の［子］~~(が)~~水~~(を)~~のんで~~[い]~~ます・

12．おとう・さん　　新聞・　　読んで・ます・
おとう　さん~~(が)~~新聞~~(を)~~読んで~~[い]~~ます・

13．子ども……　うった　歌って　　ます・
子ども~~(が)~~歌~~(を)~~歌って~~[い]~~ます・
→「うった＝歌」の促音は次の「歌って」を意識したためであるのかもしれない。

14．はい―手紙　　かって　　ます・
　　手紙~~(を)~~書いて~~[い]~~ます・
→「かって」は直前の発話の「歌って」に引きずられた保続現象の可能性がある。

15. おんな　　子　　手紙　　書いて　　ます・
おんな（の）子~~（が）~~手紙~~（を）~~書いて~~［い］~~ます・

→「おんなこ」という発話がしばしば生ずる。しかし「おとここ」という発話は一例もない。理由は不明である。発音のしにくさは、さしたる根拠にならない。

一家団らん

1．お茶の間……　父親・　　たばこ　を　のんで；
お茶の間~~［で］~~父親~~（が）~~たばこ　を　のんで；

→絵を見て、「お茶の間」の一言でまず全体を見渡し、次に父親よりコメントし始めたと考えれば、「お茶の間」で体言止めすることに問題はない。

2．母親　　編み物　　して；
母親~~（が／は）~~編み物~~（を）~~して；

3．おんな　　子・　　ともだち　　電話　　かけます・
おんな（の）子~~（が／は）~~ともだち（に）電話~~（を）~~かけます・

4．おとの―男　の　子　　入って　きます・
男　の　子~~（が）~~入って　きます・

5．ふうん　家庭団らん　くわ加わります・
家庭団らん（に）加わります・

6．夏―夏　　暑い　夕方・
夏~~（の）~~暑い　夕方~~［です］~~・

7．冷たい　ジュース　　出して・　　る・
冷たい　ジュース~~（を）~~出して~~［い］~~る・

身体療法

1．ふうん―ある―歩く・練習　　する・
歩く　練習~~（を）~~する・

2．ほし―さん　　歩く・
ほし　さん~~（が／は）~~歩く・

3．歩けて・いい　の・

4．皆さん　　どんどん　歩く・
皆さん~~（が／は）~~どんどん　歩く・

5．ウウン・ウウン・め―目　が　まわる・

6．ひっくりかえ―る・

7．こわい・

8．ベット　　取っ手　　つけ―て・ある・
ベット（に）取っ手（が）つけ　て　ある・
→「ベット［の］取っ手［に］つけてある（ベルト）」という関係詞節の可能性もある。

9．ベルト　　つかまる・
ベルト（に）つかまる・

10. 赤津先生　つけて　ください・

11. ひ-ひっくり返った・

12. 引っぱって　ください，　　あたし　　いいます・
引っぱって　ください，［と］あたし~~（が）~~いいます・

13. ウン―ウウン　あの―そで―の―怖い・

14. こおふう―し―する―心臓　　ドキ―ドキ　する・
心臓~~（が）~~ドキ　ドキ　する・
→「こおふう―し―する」は「興奮する」の誤発音の可能性もある。そうであれば無意味な発話とはいえないから、削除するのは避けるべきかもしれない。

15. もう　帰って　いい　よ　　いわれ-ました・
もう　帰って　いい　よ［と］いわれ　ました・

16. お食堂　　もど―る・
お食堂~~（に）~~もど　る・

17. 食事　　する・

食事~~（を）~~する・

18. あの―左側　たで―こな―け―ケイレン　　起こす・
　　左側~~（が／に）~~　　ケイレン~~（を）~~起こす・

19. そ―そいで　たいへん・
　　そいで　たいへん~~［だ］~~・

20. 看護婦さん　　きゃあ　この　人　たいへん・
看護婦さん~~（が）~~きゃあ　この　人　たいへん~~［だ］［と言った］~~・

21. 両側・　　かためて　くれ
両側~~（を）~~かためて　くれ

22. すごい　スピード　　ベット・n・特急車　はし―走って・もって　いって；
すごい　スピード~~［で］~~ベット（に）特急車［で］　走って・もって　いって；
→「特急車」は速さの象徴として発話した可能性がある。

23. くるま―い―いす・　　すごい　いき―ぎ―勢い　　かけて　いる―いく・
くるま　　いす~~（が）~~すごい　　勢い［で］かけて　　いく・

24. 特急-特急こんな-両側……　みんな　　わたし・　　落っこち-た ら おさえて-さ
両側［から］みんな~~（が）~~わたし~~（が）~~落っこちたら　おさえて さ

さえて；
さえて；
→「落っこちたら　おさえてささえて」は「落っこちたら［いけないと］おさえてささえて」の圧縮形の可能性がある。

25. みんな　　よる―よ―よってたかって　ベット　　のせて　くださった・
みんな~~（が）~~　　よってたかって　ベット~~（に）~~のせて　くださった・

26. あたし　ここ　　こお―こお　逆さ・　　お―ち―る・
あたし~~（は）~~　　こお　逆さ（に）お　ち　る・

27. ケイレン……こんな　ふう　な・
ケイレン　　こんな　ふう　な~~［です］~~・

28. こっち　　お茶　　飲む・
こっち［で］お茶~~（を）~~飲む・

29. お茶碗　　こう　もって　つ―突っ張った・
お茶碗~~（を）~~こう　もって　　突っ張った・

30. こないだ　食事時間・　　お茶碗　　こう　もって・こ・ぼして　る・
こないだ　食事時間~~（に）~~お茶碗~~（を）~~こう　もって　こ　ぼして~~［いた］~~〈る〉・
→［いた］を「る」に戻す。現場にいる状況を臨場的に回想しているならば「る」形で正しい。

31. そ―そう―そうなん―なん―なった　ら　一大事　お―　　思った　の・
そう　　なった　ら　一大事~~［だ］~~［と］思った　の・

32. 先生―おがせ―あたし―ケイレン止め―おこり―　　自分　　のむ薬
先生　　ケイレン止め~~（を）［ください］~~自分~~（が／の）~~飲む薬~~（を）~~
{けいれん~~止め~~}　{起こり}

ください・　　ゆった の・
ください~~［と］~~ゆった の・
→SKKの分析では「おこり」を無意味な表現として削除しているが、「ケイレン止め―おこり」が「けいれん―起こり」の意であった可能性もある。「おこり」を削除し、発していない「ください」を追加するのは行き過ぎか。

患者３　林さん（女性）（右半球損傷による交叉性失文法症状）

病　歴

1．53―年５-月に―28―日……朝・８時-ごろ・　　頭 がい-痛く　なって……
53　年５月　　28日~~（の）~~朝　８時 ごろ~~（に）~~頭 が　痛く　なって

2．お―嘔吐　が　あって　便所　に　いった　が　は―吐かなかった・

3．s―それ　から　き―救急車　で―救急車　が　病院　へ　は―は―運んで……

4．そ-その あ-あと びょ-病院から注射だけ 打って きたら な-治るから ゆうて・いた・
その　　あと　　病院~~［で］~~〈から〉注射だけ 打って きたら 治るから~~［と］~~
ゆうて いた
→SKKが変換した「で」を否定はしないが、患者自身の発話したとおりの「から」で

もなんら問題は生じない。

5．その あと きぜ-気絶-した・　／そ-れ から　き―救急車　が　健和　に　いった・

6．そ―それ　か―から・私　が　　わからん・かった・／なん―何とか　したい・
　　それ　　から　私~~{は}~~〈が〉わからん　かった・／　　何とか　したい・
→SKKが変換した「は」を否定はしないが、患者の発話どおりの「が」でも理解可能。

7．け-健和　が　い-いったら いちいちじゃん1時間-ぐらい き-気絶して　　ゆうて…
　　健和 {へ}　いった ら　　1時間 ぐらい　気絶して［いた］~~{と}~~ゆうて

8．あの　なんか　背骨　から　あの　なんか　と―とって；

9．とる　時　痛い　痛い　　ゆうて；　と―とれんかった　　ゆうて；
　　とる　時　痛い　痛い~~{と}~~ゆうて；　　とれんかった~~{と}~~ゆうて；

10．そ―それ　から　シイテエ―レントゲン―写真　　撮って・
　　それ　から　CT　　レントゲン　写真~~(を)~~撮って・

一家団らん

1．お―お母さん　が　編み物　を　して　います・

2．お父さん　た―　たばこ　に　火　が　つけて　て―テレビ　は　見て　います・
　　お父さん~~(が/は)~~たばこに　火 {を} つけて　　テレビ {を} 見て　います・
→「つけて」から逆算すればSKKの分析のように「火を」だろうが、「火が」から順行すれば「つけて」が誤りで、「ついて」（「たばこに火がついたまま」というくらいの意）であった可能性もある。

3．n―姉ちゃん　が　電話　　かけて　います・
　　姉ちゃん　が　電話~~(を)~~かけて　います・

4．おと―弟　が　新聞　　とって　おります・
　　弟　が　新聞~~(を)~~とって　おります・

5．n―なんか　ゆう？

6．せ―扇風機　が　かけて……ば―ば―バナナ　　置いて　　ます・

扇風機　が　かけて~~［あり］~~　　バナナ~~（が）~~置いて~~［あり］~~ます・

7．週刊誌　と　バナナ　が　置いて　あ―あります・

8．ジュース　が・　飲んで　います・
ジュース　｛を｝　飲んで　います・
→「が」はそれまでの発話に登場していた「姉ちゃんが･･･弟が･･･扇風機が･･･週刊誌とバナナが」に引きずられて、保続現象によって生じたものであると思われる。ただし「を」ならば、本来は発していなかった可能性がある。

9．新聞　が―が―がたがた　に　なって　おります・
新聞　が　　がたがた　に　なって　おります・
→絵を見ると新聞の不整頓の状態は「がたがた」という擬態語が表すほどの大崩れでもないようであり、これはもっと軽度の不整頓を表す別の擬態語の代替表現として用いられたようである。

10. み―みんな　ゆう？

11. と―時計　が　あります・

12. ば・が―が―額縁・　　あります・
額縁~~（が）~~あります・

13. ま―窓　　あいて　おります・
窓~~（が）~~あいて　おります・

14. n―ね―ねこ　　います・
ねこ~~（が）~~います・

15. ど―ドア　　あいて・います・
ドア~~（が）~~あいて　います・

16. ひ―ひまわり　が……か―花瓶　に　は―は―入って　います・

17. ほ―本棚　に　本　が　いっぱい　あります・

桃太郎

1．お爺さんの-おお爺さんのおばあさんが-あの お-お爺さん が しばかり に いって……
あの　お爺さん が しばかり に いって

お―お―おばあさん　が　洗濯物　を・川　に　もって　いき　ました・

2．どんぶらこ　どんぶらこ　と・も―桃　が　見つけて
どんぶらこ　どんぶらこ　と　桃 {を} 見つけて

→「桃を見つけて」の部分だけであれば「を」でよいであろうが、「どんぶらこ」という擬態語との関係を考えると、「どんぶらこと桃が［流れてくるのを］見つけて」と解釈するほうが妥当であると思われる。「3．再分析の視点」における考察を参照。

3．そ―そして　中　から　も―桃太郎　は……う―うま―生まれて　き　ました・
そして　中　から　桃太郎 {が} 生まれて　き　ました・

→桃太郎の話をしていることは承知されているのであるから、「は」でも問題はない。

4．桃太郎・が 大きく なり まして……き-きび団子 は つくって ください と・いって
桃太郎　が 大きく なり まして　きび団子 {を} つくって ください と・いって

つくって　もらい　ました・
つくって　もらい　ました・

→「を」が正しいと思われるが、はじめから「を」であったなら、この助詞は用いていなかったものと思われる。

5．お―お―鬼―たいじ　に　いって　くる　と　い―いって……

き―き―い―犬　と―犬　と　猿　と・き―雉　が　い―いました・

6．鬼が鬼がついつい鬼が島へついたら･きゃん-きゃんきゃん といいって・いい犬　が……

な―な―何だか　雉　も―雉　も　あっ・きゃんきゃん　と　いって……
何だか　雉　も　きゃんきゃん　と　いって……

→雉の鳴き声は「ケーンケーン」。直前の犬の声に引きづられた可能性が大きい。

猿も k-かみつきまして き-雉 や・なんか-き-雉 も ほ-ほ-t-つ-つついて き-います・

7．そ-そしてわ-悪い鬼たちは…も-もお-もお わ-や-もお わ-悪いことはしないと・いって・

みやげもの　を　もらって　帰り　ました・
みやげもの　を　もらって　帰り　ました・
→「みやげもの」の前に「桃太郎（たち）は」が抜けている。

8．それ　で　おわり・
それ　で　おわり~~{です}~~・

田植え・稲刈り

1．い―いま――いま　は……た―田植え　を　し―し―して　いました・

2．そ-それ から．田植えを か-か-かって-かって…かって・え…も-もってかえりました・
それ から　{いね}　を　かって　もってかえりました・

泥棒

1．ど―どろぼう　は　戸　を　あけて　しん――しんにゅう　して　き　ました・
どろぼう　{が}　戸　を　あけて　しん――しんにゅう　して　き　ました・
→泥棒の絵解きであるから、旧情報を表す「は」で特に問題があるわけではない。「は」を誤りとするのは行き過ぎ。

2．た-タンスの　あった時計 を もって-いっぱい　もって　かえり　ました・
タンスの［中に］あった時計 を　いっぱい　もって　かえり　ました・
→「タンスの［中］に」でもよいが、「タンスに」であった可能性もある。

3．ど―どろぼう　は　おって　つかまり　ました・
どろぼう　は　{追われて}　つかまり　ました・
→「おって」が {追われて} の言い誤りであるとするのはわかりやすいが、「追っ手」つまり「警察官」の意で用いられている可能性もある。実際、絵では泥棒が現行犯でつかまっているようであるから、警察官に「追われた」わけではない。「追っ手に」の縮約であった可能性も高い。

ピクニック

1．ピック――ピクニック　に　いって……犬　が……犬　が―が　いました・

2．お-おにぎり・リュ-リュックサック の 中 から と-とって・犬 が くって-食べて・
おにぎり~~(を)~~　リュックサック の 中 から　とって　犬 が　食べて・

3．お-お兄さん　に　　お姉さんの…　　弁当　が ない ので びっくり しました・
　お兄さん~~〔と〕~~〈に〉お姉さん~~の~~〈は〉弁当　が ない ので びっくり しました・

→絵では、犬が食べたのは男性のリュックの中のおにぎりだけであるとわかるから、「お兄さんとお姉さんの弁当」とするのは過剰な手直し。むしろ、「お兄さんに」はそのままにして、「お姉さんの」が「お姉さんは」の言い誤りであり、それが挿入句的に用いられているとするほうが、手直しが最小限で済む。また別の解釈として、「お兄さん」と「お姉さん」が逆になっている可能性もある。「お姉さんはお兄さんの弁当がないのでびっくりしていました」。

雨降り

1．お母さん　は　む―息子さん　に　傘　を　もって　いきなさい　と　いって……
もって いき ましたん です が　途中 で 雨 が ふって きて アッ-と-ととゆうで……
雨 が ふって きて ずぶぬれ　に　なって　い-家　に　帰った　ら……帰った　ら
……

び―び―びしょびしょ　　な―なって　お母さん　から　お―おこられて
　　びしょびしょ~~(に)~~なって　　お母さん　から　　おこられて

→擬態語の拡張的な使い方と考えられる。

か――さ――傘　を　もって――い―いって――い―いき　ました・

REFERENCES

井村恒郎（1943）「失語―日本語における特性」『精神神経学雑誌』第47巻、pp. 196-218. 井村（2010）に再録。ページの言及は再録版による。

井村恒郎（2010）『失語症論』（「精神医学重要文献シリーズHeritage」）、みすず書房。

Isserlin, M.（1936）“Aphasie,” *Bumke-Foerster's Handbuch der Neurologie Ed. VI.*

久保田正人（2007）『ことばは壊れない―失語症の言語学』（「開拓社言語・文化選書」第４巻）、開拓社.

Menn, L. and Loraine. K. Obler（eds.）（1990）*Agrammatic Aphasia : a Cross-Language Narrative Sourcebook*, John Benjamins.

Menn, L. and Loraine. K. Obler（1990）“Agrammatism in English : Two Case Studies,” in Menn and Obler（eds.）（1990）

Packard, J.L.（1990）“Agrammatism in Chinese: a Case Study,” in Menn and Obler（eds.）（1990）.

Pick, A.（1913）*Die agrammatischen Sprachstörungen; Studien zur psychologischen Grundlegung der Aphasielehre*. Springer, trans. by Jason Brown, Charles C. Thomas, Springfield, IL.［Page reference to the English translation］

Sasanuma, Sumiko, Akio Kamio and Masahito Kubota（1990a）“Agrammatism in Japanese: Two Case Studies,” in Menn and Obler（eds.）（1990）.

Sasanuma, Sumiko, Akio Kamio and Masahito Kubota（1990b）“Crossed Agrammatism in Japanese: a Case Study,” in Menn and Obler（eds.）（1990）.

Stark, J.A. and W.U. Dressler（1990）“Agrammatism in German : Two Case Studies,” in Menn and Obler（eds.）（1990）

安井　稔（2012）「日英語におけるオノマトペの落差について（上・下）」『Web英語青年』2012年７月号、８月号.

安井　稔（印刷中）「情報の圧縮について」『ことばで考える』開拓社.